

第三十四回宮島全国短歌大会
選外佳作

(三八)

山口

瀬戸内

光

白き穂を広げし萩^{おぎ}は残照の色に極まる瀉のかたすみ

(四五)

島根

花田

敦子

夕ぐれて拍手高くひびきけり宮居の千木は黒くそびえて

(四八)

福岡

飯田

俣子

禅寺の廊下に若き僧四人なにを語るや笑顔を見する

(七三)

広島

松村

常子

「天罪」を信じる君の単純を今宵も否定し電話終へたり

(八二)

広島

湊谷

文野

もういいんじゃないのかなあと言うことの増えて五十路の半ばを歩く

(一〇四)

青森

野崎

和子

無人駅長椅子に猫五匹いて体寄せ合い夕陽浴びてる

(一一七)

広島

村上むらかみ

直子なおこ

うつかりと寝そびれ夜を漂へばにくしみの藻にとらわれてゐる

(一四〇)

広島

富田とみた

清人きよと

捨て去らん踏ん切りつかず黄ばみたる名刺ふたたび書棚にしまう

(一八五)

広島

出原いずはら

知恵ちえ

炎熱の日ざし弾きて爆心地にアンネの薔薇の淡紅色に

(一九一)

広島

河野こうの

千代子ちよこ

新しき藺草いぐさスリツパ履く今朝は素足の足裏あうらがまさきに目覚む

(二一五)

山口

木村きむら

桂子けいこ

墨染の衣なびかせバイク駆る命にかかはる暑さの街を

(二二二)

千葉

小田おだ

優子ゆうこ

どのように繋がりにたるか飲みこめぬ人脈のごとき東京メトロ

(二三九)

山口

村崎むらさき

あかね

梅雨晴れを旅の途上のやうにゆく商店街は風の抜け道

(二一九九)

広島

鳥山とりやま

順子よりこ

四十三年住みたる家のしづかなり木の天井に川は流れて

(三三三五)

山口

中村なかむら

美重子みえこ

墓建てしは五十年前皆逝きぬ墓じまひする秋の日の決まる

(三三三九)

山口(岩国市)藤本ふじもと

征子せいこ

ランドセル大きくおおう孫の背がふりむきもせず四つ角曲がる

(四〇二二)

山口

田中たなか

富美恵ふみえ

被災地に汗を流せし青年の光るピアスをテレビが映す

(四一三三)

広島

小川おがわ

美和子みわこ

来し方を消すかに処分す日記帳さびしいと書く今日の日記は

(四三二一)

広島

西にし

美代子みよこ

潮引きし砂地に探すマテ貝の鉛筆のような固さをつかむ

(四三三五)

山口

山村やまむら

美代子みよこ

胃の検査医師は「ふむ」と一人ごとわれ目動かし画面をさがす

(四六五)

広島

山口 やまぐち

泰子 やすこ

今日もまた笑い合うことなく過ぎぬお前もそうか葉月のががんぼ

(五二一)

広島

大橋 おおはし

智恵子 ちえこ

針箱のヘラより白く鷺歩き買物難民まはりにふえる

(五三三)

広島

藤原 ふじはら

勇次 ゆうじ

濁流が家に迫ると生徒のこゑ避難うけいれの支度を急ぐ

(五四六)

山口

染川 そめかわ

雅子 まさこ

幼時に子等を写したカメラ捨て収集車の立ち去る音聞く

(五四八)

山口

越智 おち

治子 はるこ

待望のゴーヤのカーテン屋根まで伸び思い掛けずも薄暗き部屋

(五五二)

広島

濱本 はまもと

タツエ

日は落つも焼けつく暑さおさまらず庭に出ずれば火星は近く

(五六四)

広島

高野 たかの

和子 かずこ

とれたてのわらびが笹ごと置かれて田舎の交番だあれも居ない

(六五三)

岡山

岡崎おかざき

紀江としえ

トンネルの入口に咲く桐の花去年はこの世に在りし兄の子

(六六八)

山口

平田ひらた

敬子ひろこ

あの人は私と違う生き物でイラっとするなまだ月曜日

(六七五)

広島

山下やました

富士穂ふじほ

母にも似ぬ父にも似ぬよまあたらしきタオルに洗ふ父母ちちははのはか